

説教 『キリストと共なる死と命』
聖書 詩編 103：11～13／ローマの信徒への手紙 6：8～11

復活したイエスは、マグダラのマリアに現れ(NO.960)、二人の弟子に現れた(No.961)。しかし両者共に、それが誰かは分からなかった(ヨハネ 20:14, 24:16)。その後、イエスによって「目が開かれて」認識するが、復活は人間的な手で「掴む」ことが出来ない。ところが掴みえない現実、人間をいっそう自覚的・独立的にする。その理由として前主日、「見える事よりも信じる事の方が深い」と述べた。

通常「見える」は客観的なもので、「信じる」は主観的なもの、と考えがちだ。だが信仰は、網膜に映る何かでも、心の持ち様でもない。「あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい(ロマ 6:11)」。信仰とはどうやら「神に対して生きている」真実がこの身に帯びている状態らしい。掴みうる感性、判断しうる理性は、いかに優れていても人間の領域。信仰とは、その領域よりも「自由な神が」私において生きておられる状態なのだ。

とはいえ一方で私たちは依然、人間として生きていて、苦しみや不安によって、おろおろと恐れおののく。私自身を省みると、「そりゃそうだ、それが人間なのだ」と、つい居直ってしまう。ではなぜ、おろおろとなるのか。信仰が「足りない」からか。信仰は「神が生きている」事ならば、恵みが不足しているせいか。否、おののく理由は、恵みの如何ではなく、「私の側」にある。なぜなら、神が、私において生きておられても、私が失われるわけではないからだ。むしろ、失われていた私が色濃く現れるがゆえに、マリアや二人の弟子のようにいっそう自覚的になり、やせ我慢せずにおろおろとなる。

「わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることになる(6:8)。「神に対して生きる(6:11)」とは、「キリストと共に生きる」事であり、それは同時に「キリストと共に死ぬ」事に他ならない。共に死ぬ事なしに、共に生きる事も、ない。死に支配されない復活の生は(6:9)、キリストと共に十字架へ赴く者の自覚。自分の十字架(マルコ 8:34～35)を負わない者は、「永遠の命」という途轍もない恵みを受け取ると、その重さに足がふらついてしまう。要するに、おろおろとなる。

では十字架を負った分だけ、共に死んだ分だけ、復活の命が与えられるのか。決してそうではない。恵みは、信仰に応じて小出しにされたりしない。「天が地を超えて高いように、慈しみは主を畏れる人を超えて大きい(詩編 103:11)」。全人類の罪と死を天秤の片方につけても、復活の命はなお遥かに重い。ただ「父がその子を憐れむように、主は主を畏れる人を憐れんでくださる(103:13)」からなのだ。

「死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っている。死は、もはやキリストを支配しない(ロマ 6:9)」。今は少しばかりおろおろしていても、私たちは「キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きている(6:11)」あふれる命のすべてを、どっしり受け取ることになる。

私たちは「罪に対して死んでいる(6:11)」。罪は、あの十字架のごとくに、現実の中で、はっきりと死んでいる。もう、びくびく、おろおろする事はない。あの十字架のごとく、はっきりとキリストは復活し、死ぬことがなく、死に支配されない(6:9)。このキリストに結ばれている私たちもまた(6:11)。



《おまけのひとつ》

死と生の均衡が保たれていることが健康な自然であるなら キリストの命は 偏った反自然なのか
否 私の罪は善よりも大きく 十字架の死は私を復活させるほどに罪を凌駕する これもまた均衡